

三田のニュータウン 一天の恵みと人の営みー



「伸びゆく三田」昭和39年2月20日号

今から半世紀前の昭和39年2月20日。2ヵ月ぶりに発行された広報紙「伸びゆく三田」の第1面の見出しは「十余年の念願 神戸市合併を推進」でした。当時の三田市は、町村合併にはじまる財政赤字を打開して、まちづくりを進めるための切り札として、隣市神戸市との合併を模索していました。その機運を高めるために5ページにわたる特集記事を組んだのです。

一方、その背後では兵庫県が中心となり、三田市の自立をはかる政策が進められていました。県は前年の夏頃から市と神戸市の合併については慎重な姿勢を示していましたが、昭和39年の新春早々に市の自立と振興に向けた具体策を提示したのです。その柱は県の主導による「大住宅団地造成」と「公団公庫団地の誘致」でした。これが後に「北摂ニュータウン構想」として結実するのです。

「北摂ニュータウン構想」には、より大きな歴史的・地理的背景もありました。当時の日本は高度経済成長の真ただ中。阪神間でも過密と公害による住環境の悪化が問題となり、住宅・工場の郊外移転が急務でした。大阪・神戸から20～30キロ圏に位置する三田市は絶好の立地です。しかも市には福知山線や神戸電鉄という3方向に伸びる交通の便が既にあり、中国縦貫自動車道という国土軸とつながる計画もありました。さらに三田盆地には、開発に適したなだらかな丘陵である段丘面が広範囲に分布していました。これらの社会的・自然的環境と、県の政策との接点に「北摂ニュータウン構想」は誕生したのです。

太古の水の作用で形成された段丘面は、三田のみならず播磨灘に向かって広く分布しています。長らく開拓地として利用されてきましたが、高度成長期以降は北摂ニュータウンのように都市化が進められた地域もあれば、東播磨地域のようにゴルフ場や工業団地の適地と位置付けられた地域もあります。天の恵みを舞台に人の営みが地域の歴史を織りなしてゆくのです。